

平成25年度兵庫県景気動向検討会結果について

- 1 日 時 平成26年1月22日（金）14:00～17:00
- 2 場 所 兵庫県職員会館502号室
- 3 出席者 アドバイザリースタッフ 小沢 康英（神戸女子大学文学部准教授）
尾下 優子（神戸大学大学院海事科学研究科助教）
豊原 法彦（関西学院大学経済学部教授）
松本 英敏（日本銀行神戸支店営業課長）
丸山 佐和子（神戸大学大学院経済学研究科准教授）

五十音順

事務局 企画県民部ビジョン局長
企画県民部統計課長 外5名
産業労働部政策労働局産業政策課 1名

4 景気基準日付（第15循環の景気の山）の暫定設定について

【主 旨】

兵庫県では、景気動向指数をもとに各景気循環における経済活動の比較のために、主要な経済指標の中心的な転換点である景気基準日付を設定している。

兵庫県における第15循環の景気の山について、ヒストリカルD Iの結果や、その後の景気後退の波及度合い、縮小の程度及び期間、さらには兵庫QEや日銀短観などとの整合性を確認し、平成23年5月を事務局案として示す。については、事務局案についてご意見を伺いたい。

【第15循環の景気の山】

・一致指数採用9系列について、ブライ・ボッシュン法により個別の転換点を求め、ヒストリカルD Iを作成した。ヒストリカルD Iは平成23年5月に55.6%となった後、翌月以降50%を下回っている。さらに、その後のヒストリカルD Iをみると、平成23年12月以降22.2%と、ほとんどの部門に経済活動の収縮が波及している。このことから、景気の山は過半の系列が下降を示す直前の平成23年5月が候補として考えられる。

・山の前後の経済活動の上昇および下降の程度の量的な変化を確認するために、兵庫C I（一致指数）を参照したところ、平成21年3月の谷「70.9」から、平成23年5月の山には「88.9」まで上昇し、

この間の上昇率は25.4%となっている。過去と比較しても拡大の程度は顕著なものとなっている。山からの後退局面の下降率を確認すると、山から1年後のC I値は「88.9」であり、山のC I値「88.9」と同じで下降を示していない。山の後のC Iの推移をみると、平成23年6月から9月にかけていったん落ち込むが、10月から平成24年1月にかけて上昇している。上昇の要因としては、有効求人倍率の寄与度が高いことが挙げられる。その後再び下降していく段階で、山と同じ値「88.9」をつけ、11月には「84.3」まで下降した。山から平成24年11月までの下降率を計算してみると5.2%となり、顕著とは言えないものの下降が確認できる。

・景気の山と谷(谷と山)の間隔は5ヶ月以上、1循環は15ヶ月以上経過していることが望ましい。第15循環の拡張および後退の期間を確認したところ、拡張期間は谷の平成21(2009)年3月から26ヶ月となり、前述の目安を満たしている。過去の状況を確認すると、最も短い第13循環の14ヶ月よりは長く、過去最長となった第14循環の67ヶ月よりは短い。さらに、平成23年6月以降、平成25年1月まで、ヒストリカルD Iは20ヶ月間連続で50%を下回っており、景気後退期とみなすには十分な期間である。

・山の時期について、四半期別GDP、日銀短観(業況判断D I)、及び鉱工業指数等、県内経済の動向を示す主な経済指標の動向と整合的かどうか念のために確認したところ、概ね整合的であると確認できた。

・国の第15循環の山は平成24年4月に暫定設定されており、兵庫県とは11ヶ月のずれが生じているが、これは、国では東日本大震災後に復興需要があり景気の伸びが見られたが、兵庫県では復興需要の恩恵を受けられず、震災後も景気が後退していった事が、それぞれの採用指標の転換点のつく時期に違いをもたらしたためであると考えられる。

【主な意見】

・ヒストリカルD Iがついたので良いのではないかと思う。阪神・淡路大震災後の兵庫県の景気は旅客機の後輪に例えられ、景気の後退期には一番早く落ちて、良くなる時は遅く上がる傾向にある。今回もそのような傾向にあるが、産業構造の変化からの影響、及び東日本大震災の影響、両方から考えてもこの時期が妥当ではないか考える。

・景気基準日の暫定設定については、示してもらったもので違和感はない。短観の業況判断D Iの動きと比較してみても、過去に渡って、実感にあっているように思う。また、昨年秋、阪神・淡路大震災を挟んで過去20年程度の統計からみた兵庫県経済についてのレポートを発表したが、兵庫県経済の動向を直近2期で見ても、国と比べて景気後退期間が長くなってきている等、私共が調査した結果と概ね整合しているように思う。

・提案いただいた景気の山の時期については賛成であるが、例えばこれが1ヶ月、2ヶ月前後にずれても賛成であると思う。シャープに落ちてシャープに上がるという動きならわかりやすいが、山は特になだらかに落ちるので、一番可能性が高いのはこのあたりだと思うが、例えずれていても

賛成とってしまうほどデリケートな問題であると感じている。しかし、鉱工業指数の在庫循環图等、他の経済指標の動きを見ても今回の山の時期と合っており、ここだと判断しても良いと思う。

・ヒストリカルD Iで、はっきり山がついているので提案の時期に賛成である。資料を送付してもらう前にD IやC Iを見た感じで、どのあたりに山がつくのか自身で考えてみた際には、平成24年の初めの時期にも山のようなところがあり、そのあたりに山がつくと思っていた。他の府県と比較するために大阪や近畿のD I・C Iを見たところ、どちらもはっきりとした山が出ていなかったのので、兵庫県においてヒストリカルD Iがはっきりついたのは良かったと思う。

・景気の山谷を設定する手法について詳しくない人が見た場合に、どうしてここに山がつくのか疑問に思う人もいると思うので、2011年がどういう年かをもう少し説明した方が良かったのではないかと。東日本大震災の印象が非常強いと思うが、その後も円高で企業が苦しんだり、タイの洪水で部品供給の問題があったり、企業にとっては苦しい課題が出てきた時期である事がわかる情報がどこかにあれば、このタイミングで山がついた事について疑問に思わないのではないかと。

・C IやD Iを見る限りでは、山は平成24年の初め頃に来ると思っていたが、Q E（季節調整系列）の推移を見ると、その時期より前に既に山があり、その時期にはもうかなり下がってきているのが確認できるので、事務局案の時期で問題ないと思う。

・景気の山について、国と兵庫県では11ヶ月のずれがあるが、国では、東日本大震災の影響が大きかったために、復興需要もありその後景気は上がっていった平成24年4月に山がついたが、兵庫県ではあまり震災の影響がなかったため、この時期になったというのも納得できる。国と山の時期が違うことについては問題がないと思う。今後、あまり震災の影響がなかった地域と比較してみても良いのではないかと。

【まとめ】

・事務局案について、概ね妥当という意見をいただいたので、第15循環の景気の山を平成23年5月に暫定設定する。

5 C L Iの兵庫県への適用について（関西学院大学 豊原教授による発表）

【内 容】

C L I（Composite Leading Index）とは、O E C Dが作成している景気循環をあらわす指数であり、O E C Dに加盟する各国について公表している。各国の先行指標を用いて作成されるため、C L Iの変動は景気循環に先行するという特徴があり、景気の短期変動での定性分析に用いられる。

現在、兵庫県で採用されている先行指標7系列を用いてC L Iを作成し、現行のC Iと比較してみたところ、C L Iは、C Iより平均で4.6ヶ月先行しているという結果になった。

C L Iを用いることにより、景気の先行きについてさらに見通せるようになるのではないかと。